

Unstoppable Rain

私立清鳳学園に入学してほどなく。
放送委員の最初の集まりの日に、翔太はその人に出会った。

華奢な体にまとう学ランは翔太が着ているものと同じはずなのに、その襟元から、袖から伸びた指先から、なんとも言えない雰囲気漂ってくる。
色香、と表現するのが適切なのかはわからない。

何しろここは男子校。もちろん、目の前の相手は男の先輩なのだから。

『…なに、見とれてるの？』

そう言って艶やかに笑い、何かのプリントを配りながら、小首を傾げて斜めに翔太を見つめた。
それが山崎桂だった。

* *

「放送委員の2年で、めちゃくちゃ綺麗で色っぽい人」と言うと、それなら山崎さんだね、と皆が知っていた。

誰もが魅了される。でも、近づいてはいけないような、危うさ。
同じ制服の生徒が連なっている、そこだけ色づいたように、自然と目を引く。

「どうしたんだよ翔太、いきなり恋にでも落ちたような顔をして？」

同じクラスで仲良くなった三崎遼がそんな風に茶化してきたが、はっきり言って、あんな人に出会って心引かれないほうがどうかしている。

恋かどうかはともかく、一目で彼のファンになったことは間違いない。

翔太は放送委員の当番で山崎桂と一緒にいる日が待ち遠しかった。

どんな人なのか、知りたい。

山崎桂の名前を知る生徒は口を揃えて、「あの人に近づかない方がいい」と言ったけれど。